慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「アッケルマン」の周辺
Sub Title	Der Ackerman.
Author	尾崎, 盛景(Ozaki, Morikage)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.11, (1961. 1) ,p.87- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00110001-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「アッケルマン」の周辺

尾崎盛景

一　時代との関係

「アッケルマン」Der ackerman が書かれたのは大体一四〇一年と推定される。[註1] 作者のヨハン・フォン・テプル Johann(es) von Tepl が生れたのだが一三五〇年、死んだのが一四一五年であるから、直接「アッケルマン」に関係の深い時代を求めれば、一応それを一四世紀後半の五〇年間に限定することができるであろう。ドイツの歴史に照してみると、カール四世 Karl IV 治下の一三四七年から一三七八年の約三十年間と、ヴェンツェル Wenzel の皇帝在位の一三七八年から一四〇〇年までの約二十年間の時代にあたる。この二つの時代は明暗二様の相を呈していて、「アッケルマン」にも時代の影響はかなり色濃く反映している。今、「アッケルマン」と時代の関係を、二三の代表的な人物を素描しながら概観したいと思う。

註1　Willy Krogmann, Der ackerman, 1954, Einleitung s. 41.

A　カール四世の時代

カール四世[註1]は、早くからフランス宮廷の見習いに出され、為政者としての教養を身につけると同時に、パリー大学でスコラ哲学の教育をうけた。十四歳の若さでフランス王女と結婚し、三年間のイタリヤ滞在によって、フマニスムスの空気に接するとこができた。父ヨハンは武人で、ほとんど居城にとどまることがなく戦野にくらすことが多かったので、カールは早くからメーレン Mähren とベーメン Böhmen の政治を父王からまかせられた。一三四七年父が戦死するとカールはベーメンの王となり、次第にドイツの王と認められる様になった。

カールがドイツ皇帝に即位した頃は、百年戦争で仏軍が敗退し、これによってドイツの西境の客観的情勢が好転したため、国王は比較的安心して国内の秩序回復と文化政策に意を用いることができた。カールのモットーは「過去を改革し、現在をよりよく秩序立てる」[註2]ことにあったといわれる。彼は若い時父王を助けてイタリヤで戦ったことがあるが、その戦いは芳しいものではなく、その頃すでに軍事には見切りをつけていたのかもしれない。とにかく非妥協的態度によって戦争にみちびくよりも、行政官、組織者として改革を実行することにより多くの意義を見出したといえる。皇帝の選挙法を決めた「黄金文書」Goldene Bulle（一三五六年）もその一つのあらわれである。カールは教皇と争うことを欲しなかった。一三五五年、戴冠式のためにローマに赴き、教皇インノツェンツ六世 Innozenz VI とたくみに妥協し、カールはイタリヤを放棄し、両者は互いにその主権を尊重することを約した。カールによるイタリヤの統一を望んでいたイタリヤの愛国者たちは失望したが、彼にはひそかに期するところがあったのである。翌一三五六年に公布された「黄金文書」で彼は教皇の皇帝認可権を全く黙殺してしまった。選挙された者は同時に皇帝であるとされた。このあたりは妥協とか非妥協というよりも、名よりも実を取る、抜目のないビジネスマンとしての王の横顔が見えるような気がする。この実利主義は、それが過ぎると悪辣にさえみえる。一三四八年――五〇年に黒死病が流行した頃、貴族の借財救済のためにユダヤ人の虐殺を奨励したのなど、その最たるものであろう。

彼の三十年間の治世はベーメン王の利益追求に終始し、ドイツ全体の発展にも、またその統一にも目をつむっていたと批難される。彼が「ベーメンの父、ドイツの継父」と言われる所以もそこにあるのであろう。しかしこの批判は必ずしも当っているとは言えない。当時においては近代におけるいわゆる国家という観念は薄かったし、一体、本当に国を思う君主や諸侯が果してあったかどうかが、ま

ずうたがわしい。君主居城の地が栄えるのもごく当然のことであったはずである。それにドイツの中心をはずれたベーメンという土地がドイツ人には面白くなかったのであろう。現在でもベーメンはドイツではないのであるから。カールは確かにドイツ統一には熱心でなかった。それは当時において貴族の勢力が強いことを充分に彼は承知していたからである。無理をして紛争をひきおこすことは彼は好まなかった。私利私慾を追う愚劣な諸侯をたくみにあやつって、自分の思う政策を行なうことの方に魅力を感じていた様に思われる。

ある辞書に[註3]「カールの冷静で賢明な nüchtern-klug 政策は自家の権力拡大に集中された」と書かれている。権力の拡大ということについては今述べて来た。しかし、もしそれが本当なら、「冷静で賢明な」という点にも注意する必要があるだろう。やがて狂信的なキリスト教徒や愛国者が輩出する時代にあってはこのことはきわめて重要である。フマニストといわれながらも、狂信的なイタリヤの愛国者コラ・ディ・リエンツォ Cola di Rienzo の口ぐるまにのらなかったのも彼の「冷静で賢明な」判断によるものであった。

カールの政策について批判はあるにしても、とにかく当時ベーメン、特にその首都プラークが商業や文化の中心となって栄え、にぎわったことも確かである。カールはプラークにすぐれた建築家や彫刻家、そして画家等を招き、またドイツ最初の大学を設立した（一三四八年）。有力な市民たちは古い教育制度が、ただ僧侶や貴族にしか合わないのを感じ、自分たちの子供には一般学芸の法律、医学、科学を学ばせるために、僧院や修道院に子弟を送ることをやめて、パリーやオックスフォードやケンブリッジの大学へ留学させるものが多かった。こうした要求に応ずるためにも国内に大学をつくる必要が感じられたのである。

ヨハン・フォン・テプルの青年時代については詳しいことはわかっていないが、学芸学士 Magister Artium の称号を持ち、ザーツの書記をつとめた彼が、プラークの大学に学んだであろうことはほとんど疑う余地がない。大学に学び首都プラークの繁栄を目のあたりに見たヨハンが、ドイツ皇帝になった自国の王カールに対し深い親愛の情をいだいていたとしても、それは無理のないことであろう。それと同時に、カールを助け、祖国の文化の発展のためにつくした宰相ヨハン・フォン・ノイマルクト Johann(es) von Neumarkt の名を逸するわけにはいかない。

註1　カール四世の記述は、主として Keith Spalding, Der Ackermann aus Böhmen 1948, Introduction p. xi ff に従った。

註2　K. Spalding ibid., S. xv. "praeterita reformare praesentia bene disponere."

註3　Der Große Brockhaus, Bd. 6, 1955, s. 246.

ヨハン・フォン・ノイマルクト[註1]は市民の出であるが、僧侶を志し、同時に法律も学んだ。一三四七年にカール四世の宮廷牧師、秘書兼書記になり、一三五三年に宰相になった。その他ナウムブルク Naumburg ライトミシェル Leitomischl、オールミュッツ Olmütz 等の司教もつとめている。また一三八〇年にブレスラウ Breslau の司教に選ばれたが、教皇の許可が到着しない前に死んだとつたえられている。

ヨハンは一三五四年と六七年の二回、カール四世についてイタリヤに行っている。そこで彼は沢山のフマニストの友人を得ることができた。ペトラルカやリエンツォもその中にいた。もっともリエンツォは一三五〇年から五二年まで祖国を追われてプラークに幽閉されていたので、既にその時に会っていたということも考えられる。とにかくそれらの人々によってルネサンスの精神が彼の中に注ぎ込まれたことは間違いない。ペトラルカやリエンツォの様なイタリヤのフマニスト達と手紙を交換をすることが彼の大きな任務であった。特にリエンツォの花やかな誇りにみちた文体はヨハンの心をひきつけ、それに対して自国の官庁用語がいかに古色蒼然として生気がないかを身をもって痛感した。彼は記録係長、宰相という地位を利用して官庁のためにラテン語の手引きを作成し、その中に範とすべき手紙や諸文書の実例をのせた。この入門書は筆写され、あるいは短縮され、あるいは拡大されて隣接の官庁にもひろめられた。

しかしヨハンはそれだけでは満足せず、自国の文学にも心を向け、多くの書物を読みあさり、ニーベルンゲンの伝説やフラウエンロープ Frauenlob の格言等も彼の目にとまっていた。そして読むばかりでなく、自分からドイツ語の著述も試みた。その際、主として神秘主義やスコラ哲学で大きな役割を演じた僧侶のラテン語作品が好んで選ばれ翻訳された。また第一回目のイタリヤ行の時持ち帰った、間違ってアウグスティヌスの作品とされていた Soliloquia animae ad deum やドナウェントゥラ Bonaventura の "Stimulus amoris" 等も翻訳された。ヨハンの翻訳の写本は西ドイツ地方にまでつたわり、彼の刺激をうけて翻訳を試みるものが教多く、才能ある多くの弟子たちは師を見ならい、翻訳に、あるいは官庁用語の発展のために活躍した。一般に新高ドイツ語の成立にあたってはルターの聖書訳と並んで、マクシミーリアンの官庁用語が高く評価されているけれども、[註2]既にそれよりも一世紀早く、新しいド

イツ語への努力がヨハによってなされていることは大いに注目されてよいと思う。

問題を「アッケルマン」に返してみても同じことが言える。もし「アッケルマン」がドイツ語で書かれたとしたならば、[註3] ヨハン・フォン・ノイマルクトの影響は非常に大きいといわなければならない。更にその影響が単に漠然とした刺激という様なものでないことも明らかである。というのは、Soliloquia animae ad deum の翻訳である「愛撫の書」Das Buch der Liebkosung が「アッケルマン」の各所に引用されていることが、諸家の研究によって明らかにされているからである。特に最後の「いのりの章」はその引用から組立てられていると言っても過言ではない。

カール四世とヨハン・フォン・ノイマルクトの時代は「アッケルマン」にとっては明るい影響の時代であった。その意味で、クロークマンが、「アッケルマン」は「アルプスを越えて来た暖かい南の風が咲かせた」[註4] 花であると言っているのは適切であろう。しかし咲いた花は必ずしも暖かい日の光ばかりをうけてはいなかったのである。

註1　ヨハン・フォン・ノイマルクトの記述は Wolfgang Stammler, Von der Mystik zum Barock, 1950, s. 27-19 に教えられるところが多かった。

註2　例えば F. Kluge, Unser Deutsch, 1958, s. 34ff.

註3　「アッケルマン」は元来ラテン語で書かれたのではないか、とする学者もいる。R. Newald, Deutsche Literatur im Zeitalter des Humanismus. Ein Literaturbericht. Dvj. 27, 1953 s. 311.

註4　W. Krogmann, ibd., s. 54.

B　ヴェンツェルの時代

カール四世が死んだ一三七八年頃には、ドイツは新しい時代に向かって、政治経済宗教等各方面に様々の問題が山積みしていた。問題を宗教だけに限って見ても一三八三年にはカトリック教会の大分裂があり、世紀末から十五世紀にかけてはフス一派の活発な動きが見られる。この時にあたってカール四世の長子ヴェンツェルはわずか十七才で王位につかなければならなかった。不運といえば不運である。試みに「岩波世界人名辞典」を調べてみると次の様にしるされている。

Wenzel（チェコ）Václv 一三六一・二・二六――一四一九・八・一六 ドイツ王（一三七四／一四〇〇）、ベーメン（ボヘミア）王としてはヴェンツェル四世（一三七八／一四一九）。父帝カルル四世と継承し、残忍で諸侯と争い、捕えられて（一三九三―九四）ベーメン王の主権を放棄し、王位を廃せられた（一四〇〇）。のち再びベーメン王に復位（〇四）。なお彼の為に多教の細密画が挿入した《ヴェンツェル聖書、六巻一三八七―一四〇〇頃》が調製された。

彼が残忍であったという事実はよくわからないが、一三九三年にプラークの修道院総会長代理ヨハン・フォン・ポームク Johannes von Pomuk という人を拷問にかけ、虐殺したことがあり、[註1] それらのことをさして言っているのかと思われる。それはともかくとしてヴェンツェルの時代が一種の混乱期であったことは、右の辞書の説明からもよみとれる。「アッケルマン」第二十三章の

「喜び、紀律、羞恥心、そしてその他の好ましいものが世の中から追い払われてしまってからこの方、悪と恥辱と不実と侮蔑とそして裏切りがまったく世の中に満ちあふれている。」

ということばも、おそらく混乱した世相への嘆きとみることができる。

歴史を省みるならば、この時代、そしてまた次に来る時代に渦巻く難問題が一人の君主によって解決されるものでないことは容易に理解されるが、当時の人々の目には、先王カール四世が小器用な政治家であっただけに、ヴェンツェルが無能無力の王に映ったのも、これもまた止むを得ない。当時のある年代記は「彼（カール四世）は獅子の如く統治し、賢明で学識が高く、プラーク大学の教授たちと堂々と論戦をはることができた」とし、これに反し、ヴンェツェルは、街の腕白小僧と喧嘩をして喜んでいるチンピラである、とこきおろされている。[註2]

ヴェンツェルが余り芳しくない王であり為政者であったことは事実としても、人間的に彼がどの程度の批難をうけるべきかどうかはわからない。ある辞書[註3]には、ヴェンツェルは「若い時には才があったが、後に飲酒にふけるようになった」と書かれている。彼も決して暗愚ではなかったのであろう。ヴェンツェルをして悪徳の王にせしめたのは多分に時代の影響があるのではないかと思われる。時代の混乱は既にカール四世の時代に醸成されていたのではなかったか。カールは諸侯を巧みにあやつることによって、彼らに仲々乗ずる

すきを与えなかった。いわばカールにしてやられていた貴族たちは、その鬱憤を晴らす機会を今か今かと待っていたのである。ヴェンツェルはそのよい餌食になったわけである。彼はそれら横暴な貴族に対抗するために、政府や宮廷に思い切って市民階級の登用を試みた。ヨハン・フス Johann Hus の採用も一つのあらわれである。それに更にチェコとドイツ両国の国民感情のもつれがからみ、問題をますます紛糾させた。その結果遂にヴェンツェルはドイツ諸侯によって皇帝の地位を追われることになった。「アッケルマン」第三十二章の

「当今は世の中がすっかり変ってしまった。何もかもがあべこべだ。前が後に、後が前に、上が下に、下が上にという風に、大低の人たちが、悪いことを正しいことにすり変えてしまった。」

ということばは、「一四〇〇年の皇帝ヴェンツェル四世の廃位と、それによって生じた政情の混乱と不安を暗喩するものである」[註4]と、クロークマンは言っている。

註1 Der Große Brockhaus, Bd. 12 1955 s. 454.
註2 K. Spalding, ibd., s. xi.
註3 Der Groß Herder, B. 9. 1956. s. 1102.
註4 W. Krogmann, ibd., Anm. s. 215.

ヴェンツェルの悪評を更に高めたものは、プラークの大司教ヨハン・フォン・イェンツェンシュタイン Johannes von Jenzenstein であるといわれる。ヨハンは、前任者ヨハン・フォン・ノイマルクトの後をついでカール四世の宰相となり、ヴェンツェルの時代になってもその地位にとまどっていた。しかしヨハン・フォン・イェンツェンシュタインは若い王と意見が合わず、遂に解雇された。このことは情熱的で、野心に満ちた大司教にとって忘れ難い侮辱に思われた。彼は大司教の立場から、嫉妬とひがみをもってヴェンツェルを常に監視しつづけた。王のルーズな生活、禁慾主義と教会の紀律に対する王の軽視、また宮廷を支配しはじめた新しい思想への接近は大司教の批判のまとになった。ヨハン・フォン・イェンツェンシュタインは、元来はプラーク、パドゥア、ボロニア、パリー、モンペリ

エの各大学をおとずれ、当時ヨーロッパの知的エリートとも交わり、初期ルネサンスの流れにはかなり心を動かされ、カール四世の時代にはヨハン・フォン・ノイマルクトの熱烈な後継者をもって任じていたのである。ところが世紀末になると世俗の文化、フマニスム、国民主義、自由主義という様な新しい思想が次第に勢力を得、教会のドグマに対し公然と敵意を示すようになった。大司教が微妙な立場に立たされたとしても、「詩人たちの悪ふざけを放棄する」にはさほどの困難を感じなかったであろうことは容易に推察される。[註1]

このヨハンの思想の遍歴の中にわれわれは時流の激しさを感じ取ることができる。カール四世やヨハン・フォン・ノイマルクトの時代には、僧侶と貴族、そして新しい思想とは、必ずしもはっきりとした矛盾を示さずに、それぞれの道を進むことができたのであった。けれども、それが、ヴェンツェルやヨハン・フォン・イェンツェンシュタインの時代になるとようやく、その矛盾が表面にあらわれて来た様に思われる。フマニスティツシュな空気の中に育ち、気負って立った大司教が、結果的にはフマニスムと訣別しなければならなかったのは、ある意味では悲劇であった。ヨハン・フォン・テプルについてもまた同じことが言えるかもしれない。G・ミュラーが言う様に、もしヨハン・フォン・イェンツェンシュタインの「豊富な教化的作品が、同時代の『アッケルマン』の詩人にある種の文学的影響を与えた」[註2]とするならば、ますますこの感は深くなる。しかしその影響が具体的にどの様なものであったかは明かでない。

註1　K. Spalding. ibd., s. xviiif.

註2　G. Müller, Deutsche Dichtung von der Renaissance bis zum Ausgang des Barock, 1957, s. 54.

ここで、ウィクリフ Wiclif の説を奉じたフス一派との関係にも当然触れなければならない。フスがプラーク大学で学士の称号を得、母校にのこって教鞭をとるようになったのが、一三九六年で、一四〇一年には学芸学部長、一四〇二年と九年の二回にわたって総長をつとめている。時代的には「アッケルマン」の成立と相前後しているが、実際にフスの問題が本当にやかましくなったのは、時期的にそれよりもやや遅れていると言ってよいかもしれない、ヨハン・フォン・テプルはその頃ザーツにいたわけであるが、首都プラークの状勢に無関心であったとは思えない。もっともフスの事件は、学問や宗教の問題とはなれて、チェコ人とドイツ人との民族的な対立も無視できないようであり、その反目は大学の内部にまでもちこまれていた。問題の本質がいずれにあるのか、到底判断はつきかねる

が、問題を宗教に限って、かりにフスの運動が宗教改革の一つの前兆であるとするならば、「アッケルマン」に関して次の様な考え方も生れてくるかもしれない。「教会のドグマと現存する諸制度に対する公然たる批評攻撃をこらえているこの作品の中には、キリストの神秘な身体である教会は生きた現実となってはいずに、個人的宗教体験ばかりでなく、個人的世界観の争いと、ある意味における個人的問題の自由な解決、あらゆる仲介なしに、ただ自己の心から神への道を見出そうとする意志の方向が支配している。」これはブールダハの意見として、G・ミュラーが引用しているのであるが、彼は更につづいて、「ベーメンの精神生活のイギリス的要素が人間性理念のこの新しい形成に力を貸している」と言っている。[註1] イギリス的要素というのはウィクリフの説をさしているのであろうが、それが新しい人間性理念に寄与したことは別として、「アッケルマン」との関係を考えると、「ウィクリフの思想の影響はほとんど見あたらない」[註2]ということができるであろうし、むしろ、作者が「フス主義の勝利を願っていない」[註3]ことは前の時代批判の声から容易に汲みとれるのではないかと思われる。

註1　G. Müller, ibd., 56.
註2　W. Stammler ibd., s. s. 30.
註3　K. Spalding. ibd., s. xix.

二　文学的関係

A　論争文学

文学のジャンルの上からいうと、「アッケルマン」は論争文学の系統に属するものということができる。このことをはじめて指摘したのは、ヴォルフガング・シュタムラーで、[註1] 彼は「アッケルマン」に関して「流行の論争詩、死と人間との対話が模範となった」[註2]と言っている。

一体に、論争文学は既に古くからみとめられるが、特に中世のラテン語系文学、北欧文学、英文学において重んじられ、また流行し

た。ドイツには、それらのところから遍歴学生によって輸入されたらしく、当初は僧侶階級の経済的乱脈や教皇庁の聖物売買や金銭慾を暴露するものが多かった。後にはミンネの文学にも取り入れられ、フランスでは tençon、イタリヤでは contrasto、ドイツでは Streitgespräch として流行をきたした。論争者は、水と酒、肉体と霊魂、愛と美、名誉と恥辱、愛と浮世等が登場する。[註3]

生と死との論争も、その中にまじってよく用いられた。ラテン語の "Dialogus mortis eum homine" というのが有名で、しばしば筆写され、翻訳され、また改作された。[註4] クロークマンは更に、セネカの書として伝えられていた "De remediis fortuitorum" という書物が、「アッケルマン」に直接の動機を与えたのではないかと言い、その十六章に、妻の死をいたむ男とそれに反対する相手との論争の話があり、ヨハン・フォン・テプルがそれを詳細に引用していることを指摘している。

また「アッケルマン」とほとんど同じ主題をあつかった次のフランスの短詩が、研究者によって屢々引用される。

Mort, je me plaing.——Du qui ?——De toy.——Sue lay je fait ? —— Ma dame a pris. —— C'est vérité.——Dy moy pour quoy.——Il me plaisoit.——Tu as mespris.

しかし、この詩が直接「アッケルマン」と関係があるかどうかは不明であり、クロークマンは関係を否定しているが、その理由は述べていない。スポールディングは「死に対する反抗は人間それ自体とともに古く、中世の disputation あるいは Streitgespräch の陳腐なモティーフの一つとしてしばしば用いられた」と言っている。

従って「アッケルマン」は、形式と主題の点からだけ言えば、論争文学として別に新しいものではなく、或いは「陳腐」なものであるかもしれない。それにもかかわらず「アッケルマン」の中に、われわれを感動させる何ものかがあるとするならば、それは、妻の死という作者の悲痛な体験によることは勿論であるけれども、それを表現する文章への作者の執拗な関心を見逃がすわけにはいかない。

註1　W. Krogmann, ibd., s. 41.

註2　W. Stammler, ibd., S. 29.

註3　G. v. Wilpert, Sachwörterbuch der Litteratur. 1959, s. 600-601.

註4　この項の記述は W. Krogmann, ibd., s 46—50 と K. Spalding, ibd., p. xxx xxxiii の解説に従った。

B　マイスターゲザング

ドイツ語の文章語、更にドイツ文学への関心は既にヨハン・フォン・ノイマルクトによって養われていたが、ヨハン・フォン・テプルも、その影響下に、文書をあつかう書記という職業柄、ドイツ語で書かれた文書やドイツ文学の中に、その文例を求め集めていたようである。そうした多くの文例が「アッケルマン」を書く上に非常に役立ったということができるであろう。あるいは、そうした熱心な蒐集と、文章に対する興味と愛情が模範となるべきドイツ語の文章を作り出そうとする意慾を発展させたのかもしれない。作者は、ある友人にあてた手紙の中で、自分の試作が「ドイツ語の素材をつぎ合わせた不恰好な出来そこないである」、と言っているけれども、その手紙の全面には、作者の自信と抱負のほどが充分にうかがえる。

さて、そこで作者が手紙の中で「ドイツ語の素材」といっているものが、何をさすのであるか、またどんな文章作品が利用されているかということは大変興味深い問題であり、また実際に多くの学者たちによって様々な研究がなされている。然し今、それについて一々詳細に検討をする余裕も力も私にはない。ここでは、ただ私が最も興味をひかれた、それらのごく一部を記述するにとどめたいと思う。

「アッケルマン」に最も関係の深い文学といえば、マイスターゲザングであろう。当時は既にミンネザングの時代はすぎていた。マイスターゲザングはミンネザングの形式を踏襲しているが、その内容は、知識と教訓をアレゴリーの形式でつたえるところがミンネザングとちがっていた。したがって、それは格言詩 Spruchdichtung や教訓詩 Lehrdichtung とも共通の面をもち、そのテーマも神と世界、霊魂と肉体、精神と物質という様な問題をあつかい、それらは総じて、中世末期の精神的関心の一つの方向を示しているものといえよう。論争の文学の傾向も同じであったし、「アッケルマン」の世界も当然それに共通するものをもっている。

マイスターゲザングの創始者は、一般にフラウエンロープ Frauenlob（本名ハインリヒ・フォン・マイセン Heinrich von Meißen）といわれている。彼は自己の学識をほこりとし、宮廷的スタイルと神学の知識、それにたくみな技巧とその強い教訓性によって新しい市民文学への傾向を示している。[註1] ヨハン・フォン・ノイマルクトはフラウエンロープをきわめて高くかっていたといわれる。そ

れにカール四世の宮廷には、当時マイスタージンガーのハインリヒ・フォン・ミューゲルン Heinrich von Mügeln が滞在していた。彼の代表作「おとめの花冠」Der meide kranz はカール四世に捧げられている。ハインリヒはその他ハンガリーやオーストリーの宮廷をも訪れているが、その生涯は余り知られず、いつ生れ、いつどこで死んだかもわからない。しかし、きわめて博識の人であったらしい。彼が一面的にマイスタージンガーとして評価されてはならないが、「マイスターゲザングのしきいの上に立っていた」[註2]ということはできるようである。ハインリヒ・フォン・ミューゲルンの詩が「アッケルマン」にどの程度の影響を与えているかは、はっきりとはわかっていない。しかし校訂者の註によれば、各所に影響らしきものがうかがえる。

註1　F. Martini; Deutsche Literaturgeschichte. 1955, s. 104.
註2　W. Fische, Liedsang aus deutsherr Frühe, 1955, s. 469.

しかしながら、いわゆるマイスターゲザングの最盛期はむしろ十五、六世紀に入ってからであるから、「アッケルマン」との影響関係はむしろ、同時的、相互的なものだといってよいであろう。ただ中世末を支配する諸行無常の嘆きはマイスターゲザングの一つの特徴であり、フラウエンロープの詩の中にも既にそれが見出される。[註1] いわば、知ることの喜びと、知ったための悲しみが雑居していた時代を考えると、マイスターゲザングの世界は後者に属するものであり、格言詩や教訓詩の流行も同様の傾向を示すものと見てよい。教訓詩においてはフライダンク Freidank が、一般的にかなり強い影響を示している。

ここで少し具体的にマイスターゲザングと「アッケルマン」との関係を考えてみたい。たとえば「自分の頭の上で木を切るな、そうすれば木端がおちてくることはない」(第六章)「死んでしまったものの死をなげくのは愚かなことだ」(第八章)「愛が多ければ、それだけ悲しい目にあうことも多い」(第十二章)「熟したなしはどろ水の中に落ちたがる」(第二十章)「喜びのあとには悲しみが、愛のあとには苦しみが来るのはしかたがない」(第二十二章)等々、随所に見られる格言的言辞、また人体のきたなさ(第二十四章)、学芸の無意味(第二十六章)、夫婦の醜悪(第二十八章)、等の厭世的な議論はマイスターゲザングと共通のものを持っている。それらのものがすべてが、作者のいう「ドイツ語の素材」から生れたということはできないが、全く無関係であるということも言えないであろう。

またそれと同時に、作者がそれらの素材を借用し、或いは盗用したのは、その内容のためであるよりも、むしろ、表現法とかスタイルとか、あるいはまた、語句の撰択や配列等の修辞学上の目的をもってなされたものであることは、友人にあてた手紙からも推察できる。それにもかかわらず、内容が全く無視されたとは思えない。スタイルとともにその内容も、この論争文学にもちこまれたことはほとんど確実である。特に、マイスターゲザングや教訓等の厭世的無常観の教えが、「死」の主張の強力なよりどころとなっていることは見のがせないと思う。先の引用例もすべて「死」の発言から取られたものであり、いわばその主張、そして考え方は中世末を支配した一つの世界観を代表している様に思われる。当時流行した「死の舞踏」Totenaanz もおそらくそうした厭世観の絵画的表現であり、そこに描かれたグロテスクで陰惨な光景は、「アッケルマン」の詩人に、「死」の姿の具体的イメージを与えたにちがいない。

こうした「死」の背景となった思想を考えてみると、「アッケルマン」の発言は、勿論「死」それ自身に対する激しい批難を内容とするものであるけれども、同時に「死」によって代表される厭世観に対する詩人の必死の抵抗の声のようにもきこえる。ただ、それが、神の恩寵とか救済というものを期待するのではなくて、神によって作り出された人間が、美であり善であり、あらゆる他のものにまして秀れているという主張によって立ち向おうとする態度がわれわれの注意をひく。それは言ってみれば、人間、あるいは生の讃美にもつながるものであろう。それにもかかわらず、「アッケルマン」の主張は、亡妻への追慕と讃美に終始する感が深く、「死」の主張にくらべると、読者を納得させる力に乏しい。それは彼の主張の支えとなるべきはっきりした思想の裏づけというものがないことから来る様である。「アッケルマン」の考え方の背景には、なるほどミンネザング Minnesang やマリヤ讃歌 Marienhymen 等の影響が一応考えられる。(例えば「よい婦人の愛を持つものは、あらゆる悪い行いを恥じる」(第二十九章) という様な句は、あきらかに、ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデ Walther von der Vogelweide からの借用であろう) しかしながら、「アッケルマン」にとっては、そうした中世的婦人崇拝に頼るだけではなんとしても不安である。要するに「アッケルマン」は自分自身の思想に頼らなければならない。それはきわめて主観的な理想論であり、そのよりどころとなるものが、曖昧で抽象的な人間性というものであるのにわれわれはきづく。であるから、最後の判定を委ねられた「神」は「アッケルマン」には「名誉」を「死」には論争の「勝利」を与えたのである。「アッケルマン」に与えられた「名誉」は、言いかえてみれば、人間の「尊厳」とか「品位」というものに解してもさしつ

かえないであろう。

このように、「アッケルマン」は人間を讃美することによって、当時の、厭世的な人生観、そしてまた、妻を失ったために自分の中に生じた虚無感と戦おうと努力しているが、まったくそれから脱却することはできない。それは作者の悲痛な体験から当然のことと言わなければならないであろう。

註1　W. Krogmann, ibd., s. 213.

W・シュタムラーの言葉を借りていえば、「全体的に、このベーメンの初期フマニスムスの文学作品は終曲のない幕間劇であった」ということができるであろう。しかしこの幕間劇は、「ゲーテの『ヴェールテル』以前の最も美しい、最も注目すべき散文作品」[註2]とまで言えるかどうかはともかくとして、少くともドイツ・フマニスムス文学における唯一の完成された作品ということができるであろう。それだけにこの作品に対する問題はまだまだ多いと思われる。私の稚拙な論述はその一端をかいま見たにすぎない。

註1　W Stammler, ibd., s. 31.

註2　W. Krogmann によって引用された L.L. Hammerich のことば。W. Krogmann; ibd. s. 92.